

グローバル人材教育について

小林：今回のインタビューは、フィリピンの代表的な大学の 1 つであるアテネオ・デ・マニラ (Ateneo de Manila) 大学のビジネススクール長であられる Rodolpho P. Ang 教授をお呼びしました。ご専門は戦略的マーケティングマネジメントです。アテネオ大学では、数多くのビジネス英語のトレーニングコースを提供しており、これらの英語トレーニングコースを社内語学研修のために活用している日本企業も少なくありません。Ang 教授は長年にわたりアテネオ大学のビジネススクールの指導的な立場にあり、多様な国籍を持つ学生に対するビジネス教育プログラムの開発に従事されてきました。このようなご経験を踏まえ、日本におけるグローバル人材育成について焦点をあて、お話を伺いたいと考えています。



Dr. Rodolfo P. Ang

Dean, Graduate School of Business, Ateneo de Manila University

【フィリピンの若者にとって魅力ない日本】

小林：まず、日本とフィリピンの 2 国間関係の現在と将来の方向性について、お聞かせください。先生は、アテネオ大学で長い間教鞭をとられていますが、フィリピン人の学生諸君が、海外の国々のことをどのように考えているか、その中で日本に対してどのような印象を持っているかについてお話しいただけますか。

ANG：2 国間や国際関係については、政府、ビジネスなど、多角な方向から語られることが多いですが、私の意見としては、すべて個人的関係に尽きると考えています。

私は教育者ですから、これからを担う若者の動向についてお話ししましょう。今までの 2 国間関係は、政府や組織など非常に形式的な (formal) 関係が強かったと考えますが、最近では人の移動 (mobilization) が頻繁になり、有機的 (organic) で個人的 (personal) な関係に移行しているといえます。そして、今、フィリピンでは、アメリカや日本といった古い関係から、中国・韓国・インドと言った刺激的な新しい関係に、若者たちは魅力を感じ始めています。我々の大学では、学生の交換留学制度がありますが、この 5~10 年の間に韓国へ留学する学生が劇的に増えました。これには、韓国のテレビや映画が非常に大きく影響しています。以

前は、日本のドラマやアニメが人気でしたが、今は韓国のエンターテインメントが人気を独占していますね。反対に、私はフィリピンの若者にとって、なぜ日本が魅力的でなくなってしまったのか、不思議に思っています。

小林：非常に重要な問題提起を頂きました。



今日のインタビューでは、若いこれからの人材のグローバル化についてターゲットを絞って話を進めましょう。私自身、若い頃に海外のいろんな研究機関や組織を渡り歩き、そこで培った人的ネットワークが、今の私の財産であると考えています。若い頃に作りあげたネットワークは本当に重要です。最近の日本の若者は内向きで海外に出たがらないのですが、私にはなかなか理解できない。非常に危機感をもっています。

ANG：私にはアテネオ大学における経験しかありませんが、交換留学生として日本人学生がアテネオ大学に滞在することは非常に少ないですね。私の大学は、大学の教員が 20 名くらいのグループの学生を引率し、2 週間ほど滞在するスタディツアーが多いのが特徴ですね。このような方法では、アテネオ大学で勉強するといっても、日本人同士で行動することが多く、現地や海外からの学生と交流はほとんどありません。アテネオ大学にとってスタディツアーが収入源の 1 つですので、大学として受け入れております（笑）。

このようなスタディツアーが、いかほどの意味を持つのか大いに疑問です。その点、京都大学で実施しているアジアビジネスリーダー人材育成プログラムは非常にユニークですね。英語集中講義の後、1 人で現地企業にインターンをさせます。それはとても素晴らしいと思います。

【目立つ女性の活躍】

小林：日本人は、常にグループで行動しようと考えますし、海外に日本特有の文化や考え方を持ち込んでいきますね。アテネオ大学では、多くの日本企業に対して、ビジネス英語コースを提供されていますね。実際、フィリピンでは、韓国資本等が経営している多くの語学学校がある。その中で、アテネオ大学が提供しているビジネス英語コースは、トップレベルの水準を保っていると高く評価しています。多くの日本の企業人がフィリピンに滞在しながら、英語の研修を受けている。それは素晴らしいことだと思います。そのような英語コースを運営されていて、日本の企業人の英語能力や、英語を習得しようとするモチベーションをどのように評価されていますか。

ANG：日本人男性と比較して、日本人女性のほうが異文化や国際交流プログラムに対して、はるかにオープンですし、モチベーションも高い。しかし、これは日本人だけにあては

まることではありません。フィリピンにおいても、海外に留学する学生の割合も女性が圧倒的に多い。このような傾向は、ヨーロッパやアメリカ、アジアの大学でも共通しています。とりわけ、言語学や国際関係のプログラムにおいて女性の活躍が顕著です。フィリピン社会では、ビジネスの世界において女性の活躍が目立ちます。しかし、日本社会におけるビジネスはまだ男性中心なので、今後、日本人女性がグローバル人材として日本社会でどう活躍するのかとても興味深いです。



小林：日本人学生、とりわけ男子学生の海外留学へのモチベーションが低い（笑）。

ANG：ヨーロッパのビジネススクールでは、例外なく海外留学を必須としています。フィリピンでは、まだ海外留学は金銭的に難しいので、アテネオ大学のビジネスは海外留学を必須にしておりません。しかし、日本では海外留学に対する金銭的ハードルが低いはずですが、若いうちの海外留学は、必ず若者に良い影響を与えますよ。積極的に海外に出すべきですね。

【グローバル人材に必要な英語力とビジネスチャンス】

小林：日本人学生の海外留学数が少ないのは、語学力の問題だけとはいきれませんが、しかし、語学力の不足がグローバル人材育成に大きな足枷になっていることも事実です。日本では、10年以上も英語教育を受けているのに話せない大学生が多い。実に不思議です。

ANG：日本人は、優秀な大学出身者でも英語が話せない人が多いですね。私は中国語を13年勉強していますが、やはり話すことは難しいです。経験上、話す機会が少ないと語学は上達しないと思います。ですので、なによりも話す機会を持たせることを十分に心がける必要があるでしょう。

小林：最近、英語教育を小学生から開始する等、日本政府はグローバル人材の育成政策を積極的に推進しています。しかし、英語が話せれば、それだけでグローバル人材になれるわけでは決していない。

ANG：語学力だけでは、グローバル人材にはなりません。グローバル人材を育成するためには、まずは交流させることが重要だと考えます。最近、国際コースがある日本の大学が増加してきました。アテネオ大学からも、日本の大学に積極的に留学させております。しかし、せっかく日本の大学の国際コースに留学させても、結局他の国から来た留学生とのみコミュニケーションを行ってしまうようです。そもそも、国際コースには日本人学生も少ないので、日本人学生とコミュニケーションを行う機会が少ないようです。一方、韓国に留学した学生は、必ず留学先で韓国のネットワークやコネクションを見つけて帰国し、帰国後ビジネスに繋がるチャンスも多いようです。そう考えると、日本は多くのビジネスチャンスを逃し

ていると言えるでしょう。

小林：京都大学のビジネススクールにも国際コースがありますが、日本人学生は多くて 2～3 人。まったく日本人がいない学年もあります。日本人学生を交えたグループワークを行っても、日本人学生は発言が少なく貢献度が低いと留学生から聞きます。日本人と同じグループになることを嫌がる留学生も少なくない。そして、日本人学生は、併用して日本語授業があるような科目は必ず日本語の授業の方を受講します。必ず、英語の授業を履修させるように仕向ける必要がありますね。

ANG：私だって、英語と日本語の授業があるなら、簡単に理解ができる英語の講義を取りますけど（笑）

【グローバル人材には、相手国文化を理解する多角的な視点が必要】

小林：グローバル化された社会では、社会経済の変化や技術革新がきわめて早くなり、せっかく獲得した知識が陳腐化するスピードが非常に速い。そのため、継続的に新しい技術や知識を吸収しなければならない時代になりました。大学は、若い学生だけでなく、幅の広い世代の学生を受け入れる必要がでてきた。まさに、生涯教育が必要とされる時代になりました。

ANG：そうですね。アテネオ大学の大学院には 2 年 6 ヶ月の夜間プログラムがあり、多くの 40 代のシニア管理職が学びに来ています。海外からのシニアの学生も多いです。彼らの多くは、いわゆる駐在員です。日本人学生も 20 名ほどおられます。もっとも、アテネオ大学の夜間プログラムには 2000 人の学生がおられますので、外国人学生が占める割合は、まだ非常に小さい。シニア管理職の学生が多いため、ビジネススクールは、本校が立地しているケソン市ではなく、マニラ都心部に近いマカティに立地しています。



小林：最後に一言で、グローバル人材の条件はなんだと思われませんか。

ANG：一言で言えば、世界を理解することでしょうか。そして、世界を見るための多角的視点を持つことだと思います。私個人の経験ですが、アメリカの大学院に留学したとき、フィリピン人のルームメイトを希望しました。その方が、居心地がいいだろうと思いました。しかし、学校側からはアメリカ人のルームメイトを指定されました。フィリピン人同士だと、アメリカを理解するのにフィリピン人の視点から見ようとする。それは、アメリカ社会に対する理解ではなく、単なる推測でしかないのです。アメリカ人の視点からアメリカを理解することが大切であり、寮でアメリカ人とルームシェアをすることが多角的視点を持つ早道となると教わりました。旅行もいいですが、やはり現地の人と密に交流し、互いの文化や考

え方の違いを常に話す環境に身を置くべきでしょう。

小林: 日本の企業は、単一の視点で社員を抱え込んで管理し、多角的視点で世界と付き合うように仕向けていないのかもしれませんが、終身雇用制が通用した時代は、そのような人的資本の管理方法で、よかったのかもしれませんが、これから変革が必要だと考えます。

ANG: そうですね。先ほども話したように、これからは形式的な組織を通したネットワークでなく、個人的ネットワークと言うものが強くなるでしょう。ですので、組織や会社は変革を求められます。

小林: 日本は単一国家、単一文化ですが、フィリピンは多様性のある文化です。その一方で、国民が英語を話すことができる。フィリピン人は英語を通じた国民アイデンティティを形成しているのか非常に興味があります。

ANG: フィリピンでは、文化が多様であり、多くの現地語が存在しています。しかし、アメリカ政府による統治の下で、テレビや教育を通じてアメリカ文化に常に接してきたため、ある意味でフィリピンは単一の文化国家として均一化されてきました。そこが我々の弱みであり強みであると考えます。アメリカに統治されてきたことにより、英語が流暢に話せ、国際的になったといえます。しかし、一方で、我々は自分たちの母国語を満足に話せず、自分たちの文化や風習に誇りを持っていない部分があります。そのために、他の文化に興味を沸き、受け入れることに寛容なのかもしれません。反対に日本人は、非常に自分の文化や風習に誇りを持っていて、それが他の文化への興味の扉を閉ざしているのかもしれませんが。そう考えると、どちらもバランスが必要かもしれませんね。

